

■横山大観 明治元年（1868）～昭和33年（1958）

水戸に生まれる。東京美術学校第一期生として、岡倉天心や橋本雅邦の薫陶を受ける。明治31年、天心指導のもと日本美術院の創立に参加。新しい日本画の創造に邁進した。大正3年に美術院を再興し、以後院展を中心に数々の名作を発表。昭和12年には第1回文化勲章を受章し、明治・大正・昭和と日本画壇をリードし続けた。

■富岡鉄斎 天保7年（1837）～大正13年（1924）

京都に生まれる。幼少より国学や漢学に親しむ。画は特定の師について学ぶのではなく、明清画をはじめ、大和絵や琳派などあらゆる画風を取り入れ、自由闊達な独自の画境を創り上げた。あくまで画は余技として学問で身を立てることを志し、自らを学者と称して学識を高め、人格を磨きつつ精神性の高い文人画を生み出した。

■竹内栖鳳 元治元年（1864）～昭和17年（1942）

京都に生まれる。幼少期より絵に興味を持ち、土田英林、幸野楳嶺に師事。円山四条派の伝統的写生を基本としながら、その中に西洋画の写実性を取り入れた新画法を生み出した。文展開設に際し審査員を務め、以後官展を中心に意欲作を発表。画塾竹杖会を主宰するなど後進の育成にも熱心に取り組み、多くの逸材を輩出した。

■上村松園 明治8年（1875）～昭和24年（1949）

京都に生まれる。鈴木松年に、その後、幸野楳嶺や竹内栖鳳に師事する。官展などで京風俗や古典文学に想を得た作品を次々と発表し、頭角を現す。昭和期には簡潔で美しい線、無駄の無い造形、明るくしかも抑えられた色彩などに特色を見せながら、内面的な深みを加え、高い気品を備えた女性像を確立させた。

■西村五雲 明治10年（1877）～昭和13年（1938）

京都に生まれる。はじめ岸竹堂につくが、竹堂没後は竹内栖鳳に師事。全国絵画共進会や内国勲業博覧会などで活躍し、また第1回文展より出品して受賞を重ねる。30代半ば頃より神経衰弱に陥り長く画壇から遠ざかるが、昭和に入り本格的に制作活動を再開。鋭敏な自然観照と洗練された画風に裏付けられた花鳥画を描いた。

■菊池契月 明治12年（1879）～昭和30年（1955）

長野県に生まれる。京都で菊池芳文に師事し、主に文展などで活躍した。大正11年には欧州で、ルネッサンスのフレスコ画やエジプト美術などに接し感銘を受ける。同時に日本美術への認識を深め、古典研究に基づいた歴史肖像画や、美しい線と清澄な色彩を基調とした風俗画を描いた。

■橋本関雪 明治16年（1883）～昭和20年（1945）

兵庫県に生まれる。幼少より漢学を学ぶかわら、片岡公曠に四条派の手ほどきを受け、その後、竹内栖鳳主宰の竹杖会に入門。度々中国を訪れ、その風物や文学に取材した作品を描き、官展で評価を得た。昭和に入ると動物画も手掛け始め、

四条派、狩野派、南画などのあらゆる画風を咀嚼し、精神性を重んじた作品を遺した。

■入江波光 明治20年（1887）～昭和23年（1948）

京都に生まれる。京都市立絵画専門学校在学中より、文展などに作品を発表。大正7年、第1回国画創作協会展において第1回国画賞を受賞し、翌年より国展会員として活躍。また母校の教師として次代の画家育成に努めるとともに、法隆寺壁画模写事業にも参加。晩年には独自の高い精神性を有する画境を拓き、仏画などに佳品を遺した。

■土田麦僊 明治20年（1887）～昭和11年（1936）

新潟県に生まれる。鈴木松年塾を経て竹内栖鳳に師事。42年に京都市立絵画専門学校に入学すると、西洋近代美術に開眼。自由な個性の表現を追求し、前衛的な美術運動を展開した。大正7年には国画創作協会を結成。西洋画と日本画的装飾性との調和を追い求め、晩年には知的な美と温かな内面性が感じられる作品を描いた。

■榊原紫峰 明治20年（1887）～昭和46年（1971）

京都に生まれる。京都市立美術工芸学校などで竹内栖鳳ら京都画壇の重鎮から薫陶を受け、文展などで若くして頭角を現す。大正7年には土田麦僊らと、自由な個性の発露を目的とした国画創作協会を創設し、意欲作を発表した。晩年は画壇から離れ、高度な精神性を示した墨画を数多く遺す。生涯にわたり花鳥画を描いた。

■落合朗風 明治29年（1896）～昭和12年（1937）

東京に生まれる。川端画学校に学んだのち、京都の小村大雲に師事。第10回文展で初入選を果たすが、次いで院展へ出品を始める。大正13年からは帝展へ意欲作を発表、さらには青龍社へと活躍の場を移すが、昭和9年には脱退。自ら明朗美術連盟を創立した。常に画壇に新しい風を吹きこみ、明るい色彩と朗らかな画風の作品を生み出した。

■徳岡神泉 明治29年（1896）～昭和47年（1972）

京都に生まれる。大正3年、京都市立絵画専門学校に入学。在学中から官展に応募を始め、14年の第6回帝展にて初入選を果たす。昭和13年には帝展の審査員を務めたが、翌年辞任し制作に専念。徐々に対象を象徴的に配した画面構成、さらには厚塗りの傾向を強め、内的深化を遂げた作品を描いた。41年には文化勲章を受章。

■山口華楊 明治32年（1899）～昭和59年（1984）

京都に生まれる。西村五雲に師事し、大正5年には京都市立絵画専門学校別科に入学。同年、第10回文展で初入選を果たすと、以後官展を舞台に活躍。多くの動物画を制作した。京都画壇の伝統的な写実を基に、近代的な感覚を取り入れた温和な画面を生み出した。昭和44年には日展理事に就任し、56年には文化勲章を受章した。

■川合玉堂 明治6年(1873)～昭和32年(1957)

愛知県に生まれる。はじめ京都の幸野椋嶺などに学ぶが、上京して橋本雅邦に師事し、狩野派の技法を修得。四条派と狩野派の穏やかな調和を試みた作風で高い評価を得る。文展開設時には審査員に任命され、以後官展を舞台に作品を発表。日本の自然との中で暮らす人々の素朴な生活に着目し、情趣豊かな作品を遺した。

■菱田春草 明治7年(1874)～明治44年(1911)

長野県に生まれる。東京美術学校にて、岡倉天心や橋本雅邦の指導を受ける。明治31年、日本美術院の創立に参加。横山大観とともに、朦朧体と呼ばれる没線彩画を試みるなど、鋭敏な感覚と清澄かつ知的な眼で、新日本画の創造に専心した。美術院衰退後は文展を舞台に名作を生み出したが、44年、惜しまれつつ早世した。

■鏑木清方 明治11年(1878)～昭和47年(1972)

東京に生まれる。浮世絵師の水野年方入門。そのかわら、雑誌の挿絵も手がけるが、明治34年に烏合会を結成し、本格的に画の制作を行なう。浮世絵諸派をはじめ近世初期風俗画までの伝統表現を研究し、清方独自の画風を展開。江戸情緒に対する深い愛好を背景に、粋で人情味あふれる庶民の生活を描き出した。

■富田溪仙 明治12年(1879)～昭和11年(1936)

福岡県に生まれる。元黒田藩の御用絵師衣笠探谷に狩野派を学んだ後、京都に出て四条派の都路華香に師事する。その後、仙厓や富岡鉄斎に傾倒して古画や老荘思想の研究に励み、特定の様式にとらわれない新境地を拓いた。横山大観に認められ、以後院展へ作品を発表。官展作家中心の京都にありながら、異色の存在として活躍した。

■今村紫紅 明治13年(1880)～大正5年(1916)

神奈川県に生まれる。松本楓湖に学び、早くより画才を認められる。明治33年、安田靫彦らの紫紅会(のち紅児会)に入会し、指導的な役割を果たすようになる。大正3年には院展再興に同人として参加。大和絵を基礎に南画や印象派などの特徴を取り込んだ独自の画境を築いた。また、赤曜会を結成し、画壇に大きな影響を与えた。

■小杉放菴 明治14年(1881)～昭和39年(1964)

栃木県に生まれる。明治33年に上京し、小山正太郎の不同舎にて洋画を学ぶ。41年の第2回文展にて初入選し、画壇より注目される。大正3年の院展再興の際は、洋画部の中心となり活躍したが、9年の院展洋画部解消とともに脱退。昭和に入ると次第に東洋的なものへと回帰を示すようになり、戦後は専ら俳味のある日本画、水墨画を描いた。

■小林古徑 明治16年(1883)～昭和32年(1957)

新潟県に生まれる。梶田半古の画塾にて有職故実や歴史画を学び、博覧会等で受賞を重ねる。明治43年には安田靫彦に誘われ紅児会に入会し、今村紫紅や速水御舟とともに研鑽を積んだ。大正3年、再興日本美術院にて同人に推挙され、以後院展を舞台に活躍。洗練された線描で形態を単純化し、透明感ある端正な画風を築いた。

■安田靫彦 明治17年(1884)～昭和53年(1978)

東京に生まれる。小堀鞆音に学び、明治31年には門下生とともに紫紅会(のち紅児会)を結成。日本画壇に新風を吹き込んだ。大正3年、日本美術院の再興に参加し、以後同人として院展を舞台に活躍。大和絵を基礎に、正確な時代考証のもと、新古典主義といわれる高雅で洗練された歴史画を確立した。

■前田青邨 明治18年(1885)～昭和52年(1977)

岐阜県に生まれる。梶田半古の画塾にて、小林古徑とともに有職故実や絵巻物の模写に励み、また國學院の聴講生として古典文学を学ぶ。明治40年には安田靫彦らの紅児会に参加。一躍新進作家として脚光を浴びた。大正3年より院展を舞台に活躍。巧みな空間構成と、流麗な線描、鮮やかな色彩を活かした歴史画の名作を生み出した。

■川端龍子 明治18年(1885)～昭和41年(1966)

和歌山県に生まれる。はじめ洋画を学ぶが、後に日本画に転向し无声会に参加。大正4年からは院展を舞台に、自由かつ大胆な着想に基づく意欲作を発表した。豪放なる大画面主義を推し進め、昭和3年には美術院を脱退。翌年、「健剛なる芸術の樹立」を唱えて青龍社を設立し、以後同社を舞台に独自の境地を展開させた。

■寺島紫明 明治25年(1892)～昭和50年(1975)

兵庫県に生まれる。18歳で上京し、鏑木清方入門。同門の伊東深水らとともに郷土会を結成し作品を発表する。昭和2年の第8回帝展で初入選し、以後官展を舞台に活躍。淡い色調の中に色香を漂わせた独特の美人画を発表した。戦後は日展を中心に活躍し、阪神周辺の良家の子女を取材した優美で柔らかな美人画を描いた。

■太田聴雨 明治29年(1896)～昭和33年(1958)

宮城県に生まれる。上京して日本画を学び、大正4年には研究団体青樹社を結成。11年には、前衛的な美術運動であった第一作家同盟に参加するが、次第に離れ、制作も中断する。昭和2年に改めて前田青邨に師事し、5年に再興院展に初入選すると、以後院展にて活躍した。幅広い作域を持ち、古典的ながらも清雅な作風で親しまれた。

■酒井三良 明治30年(1897)～昭和44年(1969)

福島県に生まれる。明治44年に上京し、同郷の画家に絵の手ほどきを受けた後、独学で画技を習得。大正8年の第2回国展で入選を果たすが、翌年からは小川芋銭の勧めで院展に出品するようになり、13年には同人に推挙される。主に日本の農村風景を題材とし、水墨の妙味を生かした飄々たる筆致で人気を博した。

■伊東深水 明治31年(1898)～昭和47年(1972)

東京に生まれる。速水御舟の作品に深い感銘を受け、日本画家になることを決意する。鏑木清方入門。主に官展などで活躍した。浮世絵の流れを汲む風俗画家として、伝統を継承しながら、常に新しい画風を試み制作活動を行った。描写力に優れ、健康的で明朗な美人画を描き、多くの人に親しまれた。